

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	張 龍龍
論文題目	中国残留孤児第二世代の移住と定着－政策の展開と家族戦略・ライフコース
<p>審査要旨</p> <p>本論文は、第二次世界大戦敗戦時に中国に置き去りにされた中国残留孤児の子どもたち（第二世代）の日本への移住と定着過程を記述し、その動態をマクロ次元での政策展開と、ミクロ次元での残留孤児と家族による家族戦略の両者から説明することを目的としている。本論は、第一部・第二部・第三部から成る。</p> <p>第一部では、本論文の対象である中国残留孤児の帰国援護事業の展開を整理し、孤児の帰国に関する先行研究レビューをふまえ、本論で用いる多元的時間枠組み（ライフコース枠組み）が提示される（第1章）。残留孤児の帰国援護事業は1981年に開始され、2018年までに2,557名が日本への帰国を果たした。事業内容は孤児のライフステージに呼応して変更されたが、とりわけ、彼らの子どもである第二世代の同伴移住は、そこから強く影響を受けた。具体的には、国費同伴が20歳未満の子ども1人に制限された時期、私費による移住が可能になる時期、そして高齢になった残留孤児の老後扶養を企図した「呼び寄せ」移住を対象に含める時期への展開である。</p> <p>本論文では、こうした帰国事業政策の変遷と、日中の社会経済変動からなる歴史時間と、第二世代の移住時年齢・ライフステージとの交差をタイミングと捉え、観察対象である第二世代を4グループに分けている（コーホート設定）。具体的には、1980年代半ばまでに子ども期に移住したグループ、その後1980年代後半に青年期に移住したグループ、その後私費で呼び寄せられた成人期移住グループ、そして、2000年前後に国費・私費で同伴した中壮年期移住グループである。こうしたコーホート設定は、歴史時間と第二世代の移住時年齢をコントロールしたうえで、具体的に5つの分析課題、①移住のタイミング、②移住にあたっての課題と家族戦略、③定着をめぐる課題とその対応、④人生移行における移住の影響、⑤エスニック・アイデンティティの変容を記述し、説明することが可能となる。</p> <p>本論の考察では多層なデータが用いられており、本研究の独創性のひとつと言える。第一に、残留孤児（親世代）インタビュー（51名）、第二世代質問紙調査（89名）、同インタビュー（32名）であり、親子ペアと子世代内のきょうだい関係も同定できる。第二に、定着過程に長期間関与した専門家（自立支援指導者）インタビュー（3名）、支援関連一次資料（会報、就労支援記録、求人票、教員日記等）を活用することで、移住・定着過程での家族外の支援者による作用力の識別が可能となった。</p> <p>第二世代の分析に先立って第二部では、その親である中国残留孤児の永住帰国と定着をとりあげ、彼らの帰国動機とエスニック・アイデンティティの変容が整理（第3章・第4章）され、つづいて本論の中心的考察である第三部「中国残留孤児第二世代の移住と定着」が展開される。その内容は、各章のタイトルに明示されている。すなわち第5章「1980年代半ばまでに連れられてきた<子どもたち>－貧弱な援護政策と定着の模索」、第6章「1980年代後半以降に急かされて来た<青年たち>－懸命に危機に立ち向かって」、第7章「1990年代に呼び寄せられた<成人たち>－家族の自律性の保持と崩壊」、第8章「1990年代末以降に来日を望んだ<中壮年たち>－低い適応能力と定着の困難」である。</p> <p>本論文は、残留孤児に同伴帰国した第二世代の定着過程を詳述したこれまでにない研究である。さらにそれ以上に、研究対象が、短期間のうちに急速かつ度重なる政策変更の影響を経験した特異な集団である点に価値がある。それゆえ本論文の考察から、2つの点が明示されたといえる。すなわち第一に、帰国タイミングごとに固有の定着上の課題に遭遇し、その克服にむけた葛藤が長期間持続し、場合によっては第三世代にまで持続する様相、第二に、その過程で彼らが直面したエスニック・アイデンティティが、帰国タイミングごとに異なる経路をたどり葛藤へとつながり、さらには親子・きよ</p>	

氏名 張 龍龍

うだい間での相違を生じる実態である。

このように本論文は、ライフコース説明枠組みを用いることで、残留孤児世代と第二世代が展開した長期にわたる移住と定着にむけた家族戦略というマイクロ現象を、帰国事業政策・社会経済状況というマクロ現象上に動的に関連づけることには成功している。ただし、その動的関連のメカニズムを説明する点では、今後取り組むべきさらなる課題が明らかになった。端的に言えば、本論で明示された第二世代の帰国タイミングによる定着過程の差異は、異なる社会状況から説明できるのか、帰国時のライフステージから説明できるのか、あるいは両者の交互作用として説明できるのか、すなわち年齢効果・時代効果・コーホート効果の識別という課題である。いうまでもなくこの課題は、ライフコース論での実証研究における中核的論点である。今後、この課題に取り組むことにより、本論で明示されていない諸点、たとえば、教育社会史的視点、エスニック・アイデンティティ葛藤における定着と世代深化の視点、連鎖移住における同心円的支援システムの機能の視点等への新規な貢献がなされるものと期待できる。

公開審査会では上記の課題等を中心に質疑応答が行われたが、そこでの申請者の受け答えは真摯なものであった。本論文は、いくつかの課題を残すとは言え、中国残留孤児という戦争被害が現在にいたるまで世代間で継承・持続している実態を明らかにする大部かつ詳細な社会史的研究として、高く評価することができる。以上を踏まえたうえで審査委員会として慎重に審査した結果、本論文は早稲田大学の課程による博士学位の授与にふさわしい論文であると判断する。

公開審査会開催日	2019年 11月 20日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	嶋崎 尚子	社会学	
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	岡本 智周	社会学	博士(早稲田大学)
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	山田 真茂留	社会学	
審査委員				
審査委員				